

## アグネス・チャンさん

### チャレンジすることをおきりめないでほしいのです

歌手、タレント、エッセイスト、大学教授、ユニセフ協会大使として多方面で活躍中のアグネスさん。3人の子どもを育てながら、これらの活動を繰り広げてきました。いつも「自分に何ができる?」と問いかけてきたというアグネスさんのメッセージをご紹介します。



●プロフィール  
1955年香港生まれ。72年来日して歌手デビュー。「ひなげしの花」が大ヒットとなる。上智大学国際学部を経てカナダのトロント大学卒業。89年米国スタンフォード大学に留学。94年教育学博士号取得。98年日本ユニセフ協会大使に就任。「わたしは愛する日本」(かもがわ出版)など著書多数。

## 理想

想にこだわると、人は不安を感じたり、不満を持つものではないです。完璧な人間などいません。だから理想を求めることはなく、一人の人間としてどう生きるかなのです。私は自分を信じ、夫や子どもを信じ、自分の可能性にチャレンジしてきました。

当時3歳の長男を連れてアメリカの大学院へ留学したのもその一つです。フェミニズムの研究の盛んなアメリカで、仕事と家庭の両立について学んでみたかったのです。

合格が決まったとき、私は2人目を妊娠中でした。けれども「大丈夫、勉強しながらでも子どもは産めますよ」という担当教授の言葉に励まされ入学を決意したので

アメリカでは、子育てしながら大学で学ぶことは特別なことでは

ありません。キャンパス内には民間の保育所があり、子どもがいても授業に通うことができます。実はアメリカでは、公の保育施設はあまりありません。私がお世話になった保育園も子どもがいる大学院生たちで運営する施設でした。

ここでは経費を節減するため、親たちが保育士のアシスタントとして月に何回かお手伝いに行くのです。私も授業のない時間帯を利用して行きました。つまり、子育てしながら勉強できる環境を自分たちでつくっているのです。そうして貢献ができて、はじめてそこからサービスを受ける権利が得られるのです。

実際、大学に入るときは「あなたに貢献できるものがあるなら、ぜひ入学してほしい」と言われましたし、保育園に入るときも「あなたはこの保育園に何ができる?」と聞かれました。だから、大学では日本との比較研究がで

きます。アピールしたり、保育園へはお菓子を作って持って行ったり、また何かの集まりがあるときは料理を担当したり……。自分なりに何ができるかって、必死に考えてやりました。おかげで私は、周りからたくさん助けられていながら、出産し、子育てし、勉強し自分を成長させることができました。

だから、チャレンジすることをあきらめないでほしいのです。種をまかなければ花は咲かないように、自分にできることをやらなければ、何も変わりません。

まず、自分に何ができる?と考えてやってみませんか。学校のこと、地域のことなど、たとえば子育て中でも、あなたの周りに貢献できることはたくさんあるはずですよ。貢献すれば、自分の存在価値が感じられます。そういう経験こそ、一人の人間としていきいきと生きるための何よりの財産になると思います。

## 特集

### 「女性に対する暴力」DVの根絶に向けて

ドメスティック・バイオレンス (DV) = 配偶者や親密な関係 (恋人や婚約者など) にあるパートナーからふるわれる暴力のこと。被害者の多くは女性です。



もし、あなたがパートナーから殴る、けるの暴力や冷たい言葉を投げかけられたら……。本来なら信頼しあえる温かい関係だけに、その恐ろしさは計り知れないことでしょう。内閣府の調査 (平成14年) では、夫やパートナーから何らかの暴力を受けたことのある女性は約5人に1人、また警察庁の統計 (平成15年) によると、夫から妻への暴力で殺人に至ったケースは、133件にものぼりました。およそ暴力とはほど遠いと思われていた関係のなかで、暴力が表面に出ないまま行われていたという現実があります。

これまで女性への暴力は、あくまで男女間のもめごとであり、他人が踏み込めないプライベートな問題として受け取られがちでした。けれども、たとえ夫婦間であっても、暴力は決して許されるものではありません。解決への第一歩は、まず現状を知ることです。下にあげた事例のようなことが、実際にあなたの周りでも起こっているのです。なぜ、暴力をふるうのか。なぜ、尊重しあえる関係を築けないのか。実際に暴力を受けたら、受けてみるや聞いたり、話しすればいいのか、共に考えてみましょう。

### ケース3

自由のない生活 ● 私が外出することを嫌がる夫。実家へ行くことが許してくれない。不在中に外出したことがわかる手あげのこと。家計は夫が管理し、私が自由に使えるお金はほとんどない。

### ケース2

外では温和な夫 ● 近所の方にはやさしかったり、外ではやさしい夫。しかし家では、人が変わったように殴るけるを繰り返す。私がいらないからと勝手に私をつけるようにしているが、いつ怒り出すかわからず、毎日おびえながら暮らしている。

### ケース1

毎日の暴力 ● 夫は「俺は誰にも負けない」といって、誰に食わせる。子どもの前でのしつこく足でけられたときは本当にうらかった。

### 通信員 Report

### 「女性への暴力」あなたはどう考えますか?

- ◆ 女性への暴力は犯罪。根絶するには、一人ひとりがDVについて学習し、男女が共に人権を尊重しあえる社会を築いていくことが大切 (青木節子さん)
- ◆ 暴力は力によるものだけでなく、言葉もあると思う。特に言葉の場合、相手も暴力だと気がつかず、また第三者に相談しても、わかってもらえない場合が多いのでは (大間菜美さん)
- ◆ 旧来の固定的な性別役割分担の環境の中で育った男性は、無意識のうちに妻に対して所有意識や女性蔑視の意識を持っている。そうした男性の一部が、何らかのきっかけで暴力をふるうのではないかと思う (岡本精文さん)
- ◆ ささいな夫婦の争いがちよつとエスカレートして「妻を殴ってなぜ悪い? たかが夫婦げんかじゃないか」この意識の延長線上に、人権や人の生死に関わる深刻な問題があることを、男性は肝に銘じておかなければならないと思う (相馬匡さん)
- ◆ 加害者が悪いのは当然ですが、暴力を容認してしまう社会や表に出にくくしている社会にも目を向ける必要があるのでは (廣瀬浩子さん)

公募により「You & Me ~夢~」の編集に携わっている通信員のみなさんと一緒に考えてみませんか。